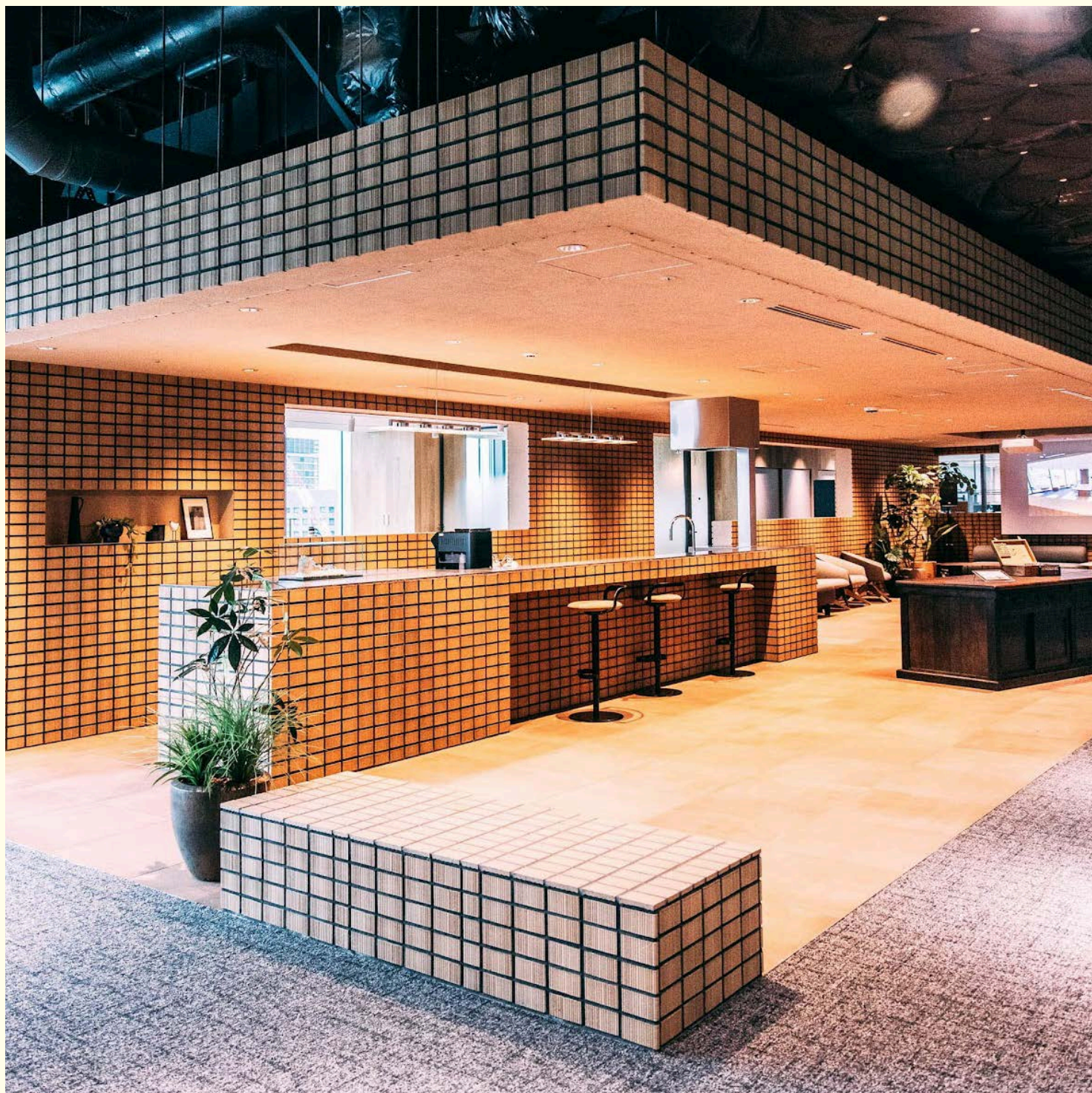


学内広報

2025.11.21

no.1600



TAKANAWA GATEWAY CITY THE LINKPILLAR 1 SOUTH 6階にて



NEXT150を見据えたコミュニケーション・キャンペーン

Challengers for Changesとは?

JR東日本との産学協創による100年規模のプロジェクト

東京大学GATEWAY Campusがオープン



NEXT150を見据えたコミュニケーション・キャンペーン

総長と理事に聞く

Challengers for Changes

コミュニケーション戦略本部は、新しい東大のブランドコミュニケーションを学内外で推進するための一助として、Challengers for Changes (C4C) をスローガンとするキャンペーンを開始しました。4年越しでこのキャンペーンを主導してきた理事と、当初からともに検討を重ねてきた総長のお二人に、C4Cにこめた大学改革の思いを聞きました。

総長
藤井輝夫理事
岩村水樹

→C4Cのロゴ。Challengersの「C」とChangeの「C」から構成し、無限大の可能性を思わせる表現に。「C」の円と連関するように銀杏印を合わせて一つのロゴとしています。



4年越しの思いがスローガンに

——このキャンペーンの構想はいつ頃に生まれたのでしょうか。

岩村 私は理事に就任する前から、東大は変わるための挑戦を続けていると聞いていました。ただ、従来はその姿が外には見えにくく、多様な分野で挑戦して社会に貢献してきたことが十分には伝わっていませんでした。総長を中心に次の150年を見据えた変革に取り組んでいますが、これはまさにChallengersだなというのが私の印象でした。このキャンペーンは、そうした東大の姿を世の中に伝えるフレームワークと位置づけています。

藤井 変化が激しい現代においては昔と同じことを続けるのではなく、社会も東大も従来の延長から外れないといけません。150周年を迎えつつある今この言葉を掲げることに意義を感じます。研究はどの分野でも常に新しいことに挑戦すべきですが、それは教育や大学経営も同じです。

岩村 東大は社会に貢献するリーダーを育ててきましたが、求められるリーダー像は大きく変わっていて、今は昔より強くChallengersが求められています。既存のやり方だけでは貢献できないからです。問いを立てる力、解決策をデザインして実践する力を持つリーダーが必要です。

藤井 東大は70年ぶりの新学部UTokyo College of Designを開設予定ですが、言

い換えればこの70年間そうした挑戦はされてこなかったわけです。C4Cはこの動きとも有機的につながっています。

——スローガンの決定はいつでしたか。

岩村 Challengersであることを明確に定義すれば、学内構成員が輝くことができるし、学外からの共感も得られるだろうと総長と話したのは、3月頃です。

全員で取り組む姿勢を強調

藤井 他にもよい言葉はありましたが、Challengersは特に構成員全員で取り組む姿勢が滲み出て良いと思いました。

岩村 ChallengersもChangesも実はUTokyo Compassや総長のスピーチなどでよく使っていたコンセプトでした。変わりさえすればよいわけでは当然ありません。目指すは未解決の問いに解を見出す変革です。今回、学外の視点が重要だと考え、卒業生でもあるクリエイティブディレクター・樋口景一さんらの力を借り、学内の声を加えました。威厳より活力、格調より熱量を強調する方向性はそこか

ら導いたもの。「象牙の塔」の印象を持つ人もまだいます。東大の変革のエネルギーを伝えて、そこを変えたいんです。

藤井 学外の方々ともっとつながりたい、国際的なビジビリティをもっと高めたいという気持ちも強かったですね。

岩村 国外で持たれているイメージは、日本を代表する大学という程度。何を指していて、どういう存在なのかを知ってもらう必要があります。それがグローバルな存在価値を高めるきっかけになります。先生たちと話してみて、国際的な学会などでプレゼンスを出すために東大のブランド力が重要だと感じていることがわかりました。また、C4Cのロゴを入れたプレゼン用テンプレートやメッセージを伝える動画を用意し、活用できるようにします。学外でプレゼンする際などに活用し、東大ブランドを拡張する伝道者になっていただきたいんです。

藤井 C4Cというのはそうしたコミュニケーションのためのツールなわけですね。

→メッセージを100秒に凝縮したC4Cプロモーション動画より。林響太郎さんが監督を務め、ヴァイオリニストの常田俊太郎さん（本学工学部卒）が音楽を担当しています。



「知見は、次代のために。試みは、希望のために。問いを生み出す力をもとに、常識の外へと歩みを進めていく。」

Challengers for Changes ステートメント

東京大学の歴史とは、知が起点となった変革の集積である。

創設以来、科学技術・法・経済・社会文化などあらゆる分野の基盤づくりに貢献し、次代へとつながる動きを生み出してきた。

そして現在、複雑にからみ合う社会課題を前に、未来への動きを加速させている。

原動力となってきたのは、たゆまぬ探究の情熱と、未知と向き合う勇気、そして常識を問い直す精神。

真に求められる変化とは、ただ新しさを追うものではない。

社会が抱える課題や、人類が探究すべき命題に対し、持続的かつ本質的に応えるもの。あるべきを思い、問いを重ね、検証をおろそかにせず、時代のあり方に対する深い対話を行うこと。

東京大学は、多様な声と視点に開かれた場として、世界とつながり、未来をつくる力を育んでいく。



未来に向けて変革を続ける東京大学の“今”を伝えるために編まれたC4Cステートメント。強調されたのは、社会課題への対応、常識の枠にとらわれず領域を超えた活動、結節点の持つ意味、多様性対話、そして国際的なプレゼンスの強化です。



C4Cのテンプレートをプレスリリースやレターヘッドに活用した例。UTokyo Portalでの配布をお待ちください。



ホームカミングデイ（10月18日）のコミュニケーション戦略本部ブースでは、ARフィルターを使用した記念撮影企画を実施。イチ公も参加してくれました。

——無限大の「∞」のほか、視力検査表みたいだとボケる人もいそうです。

コミュニケーションのきっかけに

藤 それもまたよしです。「これは何？」から「Challengers for ChangesのCCか」と連想してもらえれば嬉しい。それぞれコミュニケーション・ツールでしょう。

岩 ログには総長のインクルーシブ重視の思いが反映されました。ステートメントでは情熱の部分や「常識を問い直す」の辺りに総長のこだわりが見えましたね。

——振り返ると、140周年の際のキャッチコピーは構成員や卒業生からの公募で決まったものでした。

藤 ボトムアップの方法もありますが、ブランドコミュニケーションでは外からどう見えるかが重要だと考え、今回は学外のプロの視点に学内の視点を融合させるやり方を採りました。そもそも、岩村理事に来てもらったのも、外の視点を活かして変革に向かいたかったからです。

岩 構成員一人ひとりを輝かせたい、中

にいる人が輝くステージを提供したいとの思いが強くなりました。総長も他の構成員も私も、皆がChallengers。上から言葉を託すのではなく、C4Cというステージへのinvitationを送る感覚でした。

——変革は重要ですが、大学には変えるべきでない部分もあるかと思います。

学問の自由は変わらない

藤 学問の自由に関わる部分はもちろん変えてはいけません。ただ、社会の変化が進むなか、大学がずっと同じ位置にいるのがベストというわけではないでしょう。大学の活動に関わる学問の自由の価値を変えてはいけませんが、それはアティチュードの部分。アクションの部分は、社会とともに変わっていくべきです。

岩 考えてみれば、東大の学生は昔からどうすればよりよい社会づくりに貢献できるかを考えたり好奇心を掘り進めたりしてきました。C4Cの精神は前からあったと言えます。

藤 150年息づいてきた精神を可視化し

たキャンペーンだとも言えますね。

岩 総長が学外で話す機会にはぜひC4Cの趣旨を伝えていただきたいです。次の150年を見据えたジャーニーの過程にある東大の熱量を示すスローガンとして。

藤 わかりました。ハンドサインも使ってみたいと思います。（対談日：10月20日）



「C」と「J」の形でC4Cのロゴを示すハンドサインの実例。ペアで作るかソロで作るかは自由です。実は印を結ぶ忍者的な効果も！



Challengers for changes. その意思が、未来への扉をひらく → <https://youtu.be/zyMaKh71xbM>

東京大学 GATEWAY Campusが オープン!



A キッチンもあるラウンジスペース。安田講堂の外壁タイルをイメージしています。大机は農学部2号館の五十嵐研究室で約100年前から使われてきた実験台を再生したもの。**B** 農学生命科学研究科附属演習林の木材を使ったRIPHの看板。**C** 窓から複数の線路が一望できる鉄道ファン垂涎のロケーション。**D** ウェットラボを完備したラボエリア。**E** 北海道演習林のキハダやウダイカンバ、秩父演習林のスギなど、演習林で伐採した木材を利用した家具が随所に配置されています。



10月21日、東京大学 GATEWAY Campus / プラネタリーヘルス研究機構 (RIPH: Research Institute of Planetary Health) のオープニングセレモニーが高輪ゲートウェイシティで開催されました。2023年にJR東日本と結んだ100年にわたる産学協創協定に基づくプロジェクト Planetary Health Design Laboratory (PHD Lab.) の拠点となります。200人を超える関係者などが出席した創設記念式典の一部を紹介します。



垣根を越えた知の掛け算

高輪ゲートウェイ駅に直結する複合ビル9階に開設された東京大学 GATEWAY Campus。約1000㎡のスペースは、ラボエリア、コラボレーションエリアに分かれていて、細胞の培養を行ったり、顕微鏡でサンプルを観察したりできるウェットラボ、睡眠データを取る解析室などが備えられています。ここで目指すのは、人と地球システム全体の健康「プラネタリーヘルス」の実現です。

式典の冒頭に挨拶をした藤井輝夫総長は、「都市OSやデータ基盤、モビリティ、商業施設が集積している」この街は、研究成果を社会に実装していくための理想的な環境が整っていると紹介。「高輪ゲートウェイシティという立地を最大限に生かして、分野や組織の垣根を越えた知の掛け算によって、プラネタリーヘルスの実現に向けた多様な研究と社会実装を展開し、持続可能で心豊かな未来の暮ら

しの創造に貢献していきたい」と述べました。

「100年先の心豊かな暮らし」を目指して品川周辺の都市開発を進めている東日本旅客鉄道 (JR東日本) の喜勢陽一代表取締役社長は、このエリアを「地球益」を目指す実験場にしたいと祝辞で述べ、スタートアップエコシステムの創出や、社会実装の芽を作り育てるといったことに取り組んでいきたいと話しました。

東大とJR東日本との協創事業で人と地球にやさしい食「プラネタリーヘルスダイエット」の創出に取り組むマルハニチロの池見賢代表取締役社長は、このキャンパスは地球と人の未来を切り開く新たな挑戦が始まる「希望の場所」だと話し、どのような食事が人を健康にし、地球にも優しいのか、その答えを皆で見つけていきたいと期待を述べました。

異なる研究科に所属する教員が分野横断的に共同研究を行うために2025年1月に設立した東京大学プラネタリーヘルス

研究機構 (RIPH) の機構長、五十嵐圭日子先生は、サステナブルな未来の食、スマートシティ、ウェルビーイング、グリーンな街といった今後キャンパスで取り組んでいくテーマや概要などについて説明しました。

環境とモビリティとヘルスケア

午後のオープニング記念セッション1では、東大、JR東日本、マルハニチロによる産学協創の試みを紹介。JR東日本の高木浩一常務執行役員は、「環境」「モビリティ」「ヘルスケア」の3点が重点テーマだと説明。高輪ゲートウェイに集まる国内外のアカデミアや大企業、スタートアップ、そして1日約1500万人のJR東日本の輸送人員データ、スタートアップを支援する100億円規模の「高輪地球益ファンド」などに触れ、それらを活用してプラネタリーヘルスを実現するための実証を進めたいと述べました。

マルハニチロの小関仁孝常務執行役員



開所式典

主催者挨拶 東京大学総長 藤井輝夫→①

祝辞

文部科学審議官 柿田恭良(福井俊英審議官代読)→②
東日本旅客鉄道代表取締役社長 喜勢陽一→③
マルハニチロ代表取締役社長 池見賢→④
参議院議員 浅尾慶一郎→⑤

東京大学 GATEWAY Campus 紹介 RIPH 機構長 五十嵐圭日子

オープニング記念セッション

- 東大×JRE×マルハニチロによる「新たな産学協創」
ファシリテーター：RIPH 機構長 五十嵐圭日子→⑥
登壇者：東日本旅客鉄道 常務執行役員 高木浩一／農学
生命科学研究科 (RIPH 兼務) 教授 潮 秀樹／マルハニチ
ロ常務執行役員 小関仁孝→⑦ (左から)
- 東大が取り組む 4 つの研究テーマとその可能性について
ファシリテーター：RIPH 特任教授 高橋伸一郎→⑧
登壇者：「人にも地球にもスマートな街」生産技術研
究所特任教授 豊田啓介／「世界ーグリーンな街」RIPH 特任
教授 徳安 健／「人と地球にウェルビーイングな街」工学
系研究科 (RIPH 兼務) 准教授 田端和仁／「サステナ
ブルな未来の食を試せる街」情報理工学系研究科 (RIPH 兼
務) 教授 竹内昌治→⑨ (左から)
- 現場が求めるプラネタリーヘルス「産官学連携で何を共
創すべきか」グローバルヘルス技術振興基金 CEO 兼専務
理事 國井修→⑩

は、「魚食のリデザイン」と食を通して健康寿命を延ばす「パーソナルスーパーフード」という2つの取り組みを紹介。「これから先、世界人口が確実に増えていくなか、水産資源は資源枯渇の危機に瀕している。消費者や地球の健康に気遣いながらも、どうやって安定的にしっかりとした蛋白質を提供していけるのか。そこに対しての取り組みを一緒に考えていく」と話しました。

農学生命科学研究科の潮秀樹先生は、将来的にはウェアラブルデバイスやJR東日本のモニタリング技術なども使ってリアルタイムで個人のデータを取得することで、一人一人に合った食品をデザインし提供したいとコメント。それによって未病を解決し、健康寿命が延伸する社会を形成したいと展望を語りました。

プラネタリーヘルス達成のために

ファシリテーターを務めた五十嵐先生は、新キャンパスには「何学部が来るのか」といった質問をよく受けると話し、「プラネタリーヘルスを達成するためであれば、何でもやります。どこでもつながります」というのが答えだと意気込みを語りました。

RIPHの高橋伸一郎先生がファシリテーターを務めたセッション2では、プラネタリーヘルスに関する4つの研究テーマとその可能性について語られました。

都市建築などを研究する生産技術研究所の豊田啓介先生は、自身が取り組む現実空間とデジタル空間が交錯する次世代の社会基盤「コモングラウンド」構想について説明。没入型デバイスとしての建築都市をいかに私たちが汎用のものとして考えるかが喫緊の課題になりつつある、と指摘し、物理的身体や領域を超えた「個人」や「集団」といった概念、社会的仕組みなども並行して考える必要があると述べました。業態や分野を超えて産学連携で実証実験を行えるキャンパスには大きな価値があると話しました。

バイオマス研究などに取り組むRIPHの徳安健先生は、「世界ーグリーンな街」というテーマを紹介。緑化植物などを利用したバイオマス(再生可能な有機性の資源)の創出や、バイオテクノロジーを活用してCO₂を固定するといったグリーンな街を実現するためのアイデアを提案しました。また先生が研究する、糖質の資源利用などについても紹介し、バイオ燃料や生活の質を高めるようなものに活用していければと語りました。

工学系研究科の田端和仁先生は、睡眠、未病状態での発見、そして感染症に関する東大の研究を紹介。睡眠の状態を測定できる技術開発によって、快適な睡眠とは何かにアプローチできるようになってきていることや、がん細胞に反応して光

る「蛍光プローブ」の開発やウイルスを1粒子レベルで検出できる技術などについて説明しました。尿が光るかどうかで未病状態を発見したり、スマホのカメラでウイルスの検出をするといった未来の可能性についても触れました。

魚や絶滅危惧種の培養肉も!?

生物と機械が融合したロボットなどを研究する情報理工学系研究科の竹内昌治先生は、牛や鶏の培養肉研究を紹介し、今後は魚や絶滅危惧種の細胞を培養して肉がつかれないかといったことも考えていると話しました。ラボエリアに設置された試食できる実験室も活用して、美味しさとは何なのか、といったことを探る実験場にしたいと述べました。

最後に登壇したのは、グローバルヘルス技術振興基金の國井修CEO。国連児童基金の上席保険戦略アドバイザーや国際NGOの副代表などを務めアフリカやアジアなどで活躍してきた國井さんは、公害、感染症、森林火災、洪水といった世界で起こっている現状について紹介。プラネタリーヘルス実現のためには戦略や真のオープンイノベーション、そしてスピード、柔軟性、多様性などが重要だと述べ、「開所式が終わった後から走ってください」と期待の言葉で締めくくりました。

教養教育の現場から

第72回

リベラル・アーツの風

東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

広告のプロたちとともに学内で大学の外に出よう！

全学自由研究ゼミナール／東京大学×電通「企画の研究所」

総合文化研究科教授
社会連携部門

桑田光平



——電通とのコラボによる授業ですね。
「そもそもは近所のバーでコピーライターの吉村優作さんと出会ったのが発端でした。電通と組んで授業という話が盛り上がり、プランナーの尾上永晃さんと話すうちに「企画の研究所」というコンセプトが浮上しました。プランナーとはまさに企画者。ものの見方を変えたり社会課題に取り組んだりすることも企画には含まれます。学生に少し違う頭の使い方をしてもらう授業を目指し、2024年4月に開講しました。企画で社会を少しでもよくするための研究所という体裁です。学生は研究所の所員。第一線のクリエイター陣が毎回講師として指導します」

「3つの目」を鍛える実地調査

「ものの見方を学ぶため、所員たちはフィールドワークを通して虫・鳥・魚の「3つの目」を体感していきます。最初に取り組むのは、キャンパスを1時間歩き、小学4年生の視点で遊び方を見つけること。たとえば、教室に多数放置された新歓ビラで紙飛行機を折り、収集箱に飛ばして入れる「ビラ飛行機シューティング」というアイデアが出てきました」

——遊びを入れれば掃除も楽しい、と。

「別の回では、チームごとに渋谷を歩き、人により異なる街の見え方を地図にしました。街宣車の音や店のBGMなどの人工音が聞こえる領域のみを渋谷と捉える地図や、監視カメラに映らない死角を集めた地図などを作ることで、見慣れた街が新鮮に映る体験を味わう。広告コピーや短い動画を制作してプロに評価してもらう試みも繰り返し行いました。授業は1回2時間半。毎週課題も出されます」

学食でメニュー別に売上を競う

「Sセメでの訓練を経て、Aセメは実践を行います。一例が東大生協と連携した学食企画。副菜メニューをいくつか選び、チームごとに売上の向上策を競いました。オクラのお浸しを担当したチームは、オクラと扇風機を置き、食堂に匂いを充満させる実験中だと貼り紙でPRしました」

——オクラって匂いしませんよね？

「はい。「カレーの匂いを嗅ぐとカレーの口になる」などと言われることを意識した策ですね。鶏のレバー煮のチームは、文学調のストーリーを原稿用紙風ポスターにして料理受取エリアに掲出。冷奴のチームは、現代アートのような四角い白い物体を構内の随所に展示。そんななか、

売上率を最も上げたのは、温泉卵のチームでした。「なかやまきんにくんが一日5個食べる」というコピーとシズル感のあるビジュアル展開が効いたようです」

——駒場祭も授業の一環だったとか。

「「もやけ屋敷」という企画を出展しました。カラオケで歌い始めると皆がトイレに立つ、猫カフェで自分だけ猫が来ないなどもやもやを形にした展示です。来場者は自分のもやもやも付箋に書いて貼り出す。もやもやを他人と共有すればすっきりすることを踏まえた企画でした」

「学生は社会経験がまだ少ないせいか、NGが出て当然のポスターを作ったり、炎上必至の案を出したりもします。駒場祭ならきちんと届けを出すと、予算管理やシフト調整などの事務も欠かせません。思いつきやノリだけでは企画が実践できないと知り、要望と現実を擦り合わせることは、貴重な経験となるはずです」

「社会連携部門の教員として伝えたいのは「大学の外に出よう」ということ。学歴も成績の優劣も担当教員の評価も関係なく、ここではアイデアがステーキホルダーに認められるかどうかこそが重要です。大学にいながらにして外の社会が味わえる授業かなと思っています」



①Xで599万回表示されるほどの大反響を呼んだオクラチームの企画ですが、売上は思ったより上がらなかったとか。「そこが面白いところだ」（桑田）。②レバー煮チームのポスター。白鳥くんと蒼翔さんは幼馴染の関係です。③駒場博物館の協力も得て展示された冷奴アート。「無限の想像力を人間にかきたてる無垢の白さ」が特徴。④食欲をそそる写真ポスターとキャッチーなコピーの合わせ技で結果を残した温玉チーム。⑤駒場祭で人気を博した「もやけ屋敷」。顔ハメ位置の低さももやもやの一つ。⑥授業の報告書はいわゆるZINEスタイル。編集後記はChatGPTとの対話スタイル。

UTokyo 第40回 バリアフリー最前線!

障害がある職員のお仕事拝見⑯

日光植物園
の巻



除草から日光花しおり作りまで

2010年4月に発足した障害があるスタッフ6人とコーディネーター2人で構成される日光植物園環境整備チーム。園路とトイレの清掃から始まったチームの業務は徐々に拡大し、現在では高山植物が植栽されたロックガーデンの除草や屋内清掃、園内の花を使ったしおりやマグネット作りまで多岐にわたっています。その貢献が認められ、2023年度には業務改革総長賞の理事賞を受賞しました。

10月上旬頃から冬にかけて、サクラ類、ブナ、カエデ類、ツツジ類などの紅葉が徐々に進んでいく園内。それらの色づいた落ち葉を掃き集める作業が好きだと話すのは2016年に入職した竹内農さん。「美しい紅葉を見ながら熊手で落ち葉を回収していると、とても気分がよくなります」

草取りも重要な作業の一つだと話すのは昨年入職した菊池瑠磨さん。園路周辺を中心に、鎌などを使って根っこから刈っていくそうです。2016年に入職した大毛忠好さんは、生い茂っていた雑草が綺麗に刈り取られた後はすっきりとして気持ちがいいと言います。約2,200種類の高山植物や寒冷地の植物を育成する園内の作業では、大切な植物を誤って抜いてしまわないように「落ち着いて取り組むことが大切です」と説明するのは今年で10年目の大門陽一さん。

天候が悪い日は屋内作業を行います。その一つが、園内やUTCCで販売している「日光花しおり」や「日光花マグネット」の製作です。春から夏にかけて園内の花を摘み、それらを押し花にしたものを使っています。

「ぜひ日光植物園に来園してほしい」と話すチームメンバーたち。昨年入職した福田日向子さんのおすすめスポットはミズバショウ池。「池の周りには東屋やベンチもあり、小川のせせらぎも聞けてすごく気持ちがいいです」。2019年に入職した日下滉太さんによると、春やお盆、秋は混雑するため、ゆっくりと園内を周りたい場合はそれ以外の閑散期がおすすめだそうです。綺麗に整備された植物園を訪れてみてください。



(前列左から)大門陽一さん、菊池瑠磨さん、日下滉太さん。
(後列左から)大毛忠好さん、福田日向子さん、竹内農さん。

#WeChange Now

第16回 ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

女子中高生のための説明会を開催

10月25日(土曜日)に、女子中高生および保護者を対象とした、オンラインイベント「中高生のための東京大学説明会」を開催しました。当日は、女子中高生およそ80人、保護者およそ10人が参加しました。

説明会では、はじめに、林香里理事・副学長から開会のごあいさつで女子中高生に、さまざまなことにチャレンジしてほしいという励ましのメッセージをいただきました。薬学系研究科の後藤由季子教授からは、東京大学の概要について説明がありました。そのあと、在学生2名の話提供があり どうして東大を目指しているのか、留学の体験など、等身大の東大生のお話をいただきました。

後半では、藤井輝夫総長のお話、参加申し込みの際に中高生からいただいた質問への回答があり、そのあと、今回の説明会の主要な企画である現役東大生と女子中高生との交流がありました。希望者は藤井総長と直接交流があり、活発に議論が行われました。

参加した生徒さんからは、「自分のほかにも全国に東大に興味のある中高生がこんなにいるんだと励みになりました」「少しハードルが高いように感じていた東大について、説明会を通して少し身近に、自分にもありえる選択肢だと感じることができました」といったご意見をいただきました。

今回のイベントは、全国の様々な地域から中高生、保護者の方にご参加いただきました。参加したみなさんが、東京大学をより具体的にイメージし、将来の選択肢を広げる貴重な機会となったものと考えております。今後も当オフィスでは、中高生に向けて情報発信、

サポートを続けてまいります。どうぞご期待ください。
(特任研究員 久保京子)



説明会の
ポスター

ワタシのオシゴト 第234回

RELAY COLUMN

情報学環総務チーム 一般職員 加藤良隆

今、必ず誰かがどこかで死んでいる



「ワタシのオシゴト」本編については、QRコードよりぜひ一読ください。ここからは「ワタシのオシゴト」特別編になります。

2017年12月1日、父が死んだ。享年60歳。私が父と過ごした日数を数えてみたら、9,115日だった。その日々の中で特別な思い出があったか、思い出そうとしてみたが思い浮かばなかった。生前、面と向かって何かを語り合うこともなかった。たくさん後悔があるが特に悔やんでいることが1つある。父に“ある言葉”を言えなかったことだ。心には抱いていたが結局口にできず父は死んだ。

通夜・葬式、多くの方に参列いただいた。たくさんの方が父の死を悼んでくれ、その時に初めて父の偉大さを知った気がした。



「あんちゃんたちよ、変えちゃえよ。時代」

その日は満月、今でも満月を見るとあの日のことを思い出す。空を見上げると今日も満月だ。何を書くか迷っていたが父のことを書くのは運命だったのかもしれない。

父さん、色々あったけど何とかやれてるわ、もう少しだけ頑張るわ。最後に1つだけ言わせて。今まで、本当にマジで“ありがとう”。

得意ワザ：100mを9.42秒で走ることができる

自分の性格：すぐ嘘をつく

次回執筆者のご指名：石田美里衣さん

次回執筆者との関係：先端研在籍時の先輩です！

次回執筆者の紹介：シゴデキで音楽もできちゃう神！

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第40回

農学部3年 山崎美怜

城跡から松倉を考える

北は富山湾、南は立山連峰に連なる山地に囲まれた富山県魚津市は蜃気楼で有名な町です。私たちはそんな魚津市の山あいにある松倉地区で1年間活動を行いました。

松倉地区には越中最大の山城である松倉城跡があります。松倉城は南北朝時代頃に築かれたとされる歴史ある山城で、上杉謙信や織田信長などの争いの舞台にもなりました。山城ならではの入り組んだ地形や、魚津市を一望する絶景に驚きました。

私たちの活動のテーマは「越中最大の松倉城跡を中心とした里山の暮らしと地域の再興」でした。夏休みには松倉城跡の調査はもちろん、金山坑道の見学や松倉地区の刀踊りなどの伝統文化の学習、藍染めや棚田での農業といった松倉の自然との関わり方を学びました。松倉地区の方との交流会では、地域への愛情や責任感を強く感じました。松倉地区を維持するために人を呼ぶ、今住んでいる人たちが幸せに暮らすために地域活性化を進める、という、私にとっては新たな地域おこしの視点でした。

1回目の現地活動を通じて地域を盛り上げる提案内容を考え、秋に行った2回目の現地活動では地区の文化祭で中間発表を行ったり、地域の伝統的な食文化体験を行ったりしました。それらの活動を通じて、「松倉城址を小学生の遠足場所に」、「地域の幸を活かしたアイスクリームの製造・販売」、「空き家の企業向け貸出」、「コミュニティセンターの活用」、「狩猟サークルなどの若者誘致」の5つの提案をさせていただきました。

人口減少や耕作放棄地など地方が抱える課題の複雑さや里山集落ならではの繋がりの強さを感じました。人が温かくパワフルで景色が美しい富山県魚津市へぜひ一度訪ねてみてください。私もまた訪ねようと思います！ほんならねー！



地域の方との交流会で伝統的な踊りを教わる

フィールドスタディ型政策協働プログラム

<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/special-activities/h002.html>

●メンバーはほかに加藤小百合（工学系研究科修士2年）、森山日天（経済学部卒業）、鳥居希実（文学部3年）、溝口慶（文一2年）

インタープリターズ・ バイブル

第219回

カブリ数物連携宇宙研究機構／情報学環教授
科学技術コミュニケーション部門

横山広美

サステイナブルAI、グリーンAI

AIを使うと、遠く離れたデータセンターで多くの電力が消費される。様々な試算があるが、Google検索の20から30倍の電力に相当するという報告もある。テキスト生成よりもイラスト生成により多くの電力が消費されるのは想像の通りだ。これがAI時代の新たな環境問題として注目を浴びている。これまで別々に研究をされてきたAI倫理と環境倫理がマージする、興味深い議論である。筆者たちの調査で、この件に関する認知度は韓国で51%なのに対し、日本では22%しかないことがわかった。

AIはすでに私たちの日常の一部、研究活動の一部になっている。もともと画像認識を使っていた方々も多いと思うが、生成AIが出てきてコードのバグ取りがしやすくなったという声も聞く。英文チェックはもちろん、調べものに使う教職員も多いと思う。教育にどの程度使ってよいかは議論が分かれるところだが、学生も日常的に使っている。つまり我々はAI利用の当事者として、この問題に一定の責任がある。

すでに今年、政府は第7次エネルギー基本計画にて、AIを含めた理由によって原発及び再生エネルギーを最大限に利用することを宣言した。東日本震災および福島原発事故以降、社会は原発を使うことを否定したが、ウクライナ戦争以降の急激な電気代値上がりを受け、原発利用もやむなしと考える人が増えてきた。AI利用は思いもよらず、電力供給の源として原子力発電利用の問題にも発展する。

電力を消費するAIをサステイナブルにしていこうというドイツの倫理学者の呼びかけで、サステイナブルAI研究が始まっている。さらに具体化したグリーンAIというコンセプトも提示されている。グリーンby AIと、グリーンin AIがあり、前者はAIによってスマート農業などグリーン化を進める一方、後者はAI自体をグリーン化していく活動で、最近富士通が電力消費を抑えたチップの開発に成功した。

スマホやノートPCで使う電力は小さいことから、AI利用によって大量のエネルギーや水を使っている実感は薄い。実感を伴った科学コミュニケーションが必要になっていくであろう。

(参考)

Cho, Y., Wang, S., Kinoshita, S., Yokoyama, H. Linking public awareness to RRI pathways for sustainable AI: a survey from Japan and South Korea. *AI and Ethics* (2025).
<https://doi.org/10.1007/s43681-025-00822-5>

科学技術インタープリター養成プログラム
<https://scicom.c.u-tokyo.ac.jp/program-2>

ききんの

寄付でつくる東大の未来

き

第73回

ディベロップメントオフィス
アンジェイトディレクター

宮田祥英

大学周辺で広がる150周年応援の輪

「東大って2027年で150周年なんだ!」、「赤門って閉まっているのですね」。私は驚愕した。なぜならこれらの言葉が長年本郷通りで事業を営むお店や企業の方々が発した言葉であったからだ。

私は今年の4月よりディベロップメントオフィスに所属し、個人や企業の方々に寄付を通じた大学への支援を訴求する仕事を行っている。寄付を通じて多くの方々に応援してもらえる大学になることが、今後の持続可能性における重要な課題であることははや言及するまでもないだろう。

最もご支援をいただける可能性のある方々は誰になるかと考えたときに、真っ先に思い浮かんだのは大学近隣の方々であった。彼らは何らかの形で大学と関わりを持っているはずであり、大学の最大の理解者だと予想した。そして近隣で事業を営む50以上の個人や企業を訪問した。

結果は先に述べた通り、150周年や赤門の現状について認知していないという層が多数存在した。大学の成長を身近な方々が応援してくれていないというのは、大変悲しい現実であった。しかし同時に、150周年は新しいつながりを築くチャンスでもある。この素晴らしい機会に改めて関係構築を行い、応援の輪を広げていくことが重要だ。

現在、ディベロップメントオフィスではコミュニケーション戦略課など他部門と連携し、文京区役所や商店街連合会、町内会などと地域連携を強化しており、大学の現状やご支援の必要性に理解、共感いただくこと

でご寄付や認知拡大のための広報活動にご協力をいただいている。町内会の掲示板で赤門のポスターが掲示されているのを見た職員の方々もいることであろう。

着々と応援の輪は広がってはいるがまだ足りない。この150年に一度の機会に1人でも多くの方々に認知、共感をいただき支援者を増やしたいと心より願っている。そのためには全部局一丸となって取り組む必要性がある。皆様には大学のことを大学外に話をする機会に、どうか大学の現状を伝えてほしい。

東京大学基金 <https://utf.u-tokyo.ac.jp/>



「本郷同四会」の掲示板

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
10月10日	情報理工学系研究科、生産技術研究所	TIME Best Inventions 2025に培養チキンが選出 竹内昌治教授の研究室による成果
10月14日	リサーチ・アドミニストレーター推進室	「はばたく次世代」研究ブースプログラム 報告会・交流会
10月17日	本部コミュニケーション戦略課	遺骨返還等タスクフォースの設置について
10月20日	生産技術研究所	東大生研ウェブマガジン 特集記事を公開（2025年10月）
10月21日	本部協創課	東京大学GATEWAY Campusオープニングセレモニー
10月21日	附属図書館	オープンアクセスハンドブック第3版を公開
10月28日	本部社会連携推進課	令和7年度「東京大学稗門賞」授賞式を挙行
10月28日	総合文化研究科・教養学部	奥田拓也助教らの論文がBest Paper Prize 2025を受賞
10月29日	本部学生支援課	東大ヨット部が関東学生ヨット選手権大会で総合5位入賞！
10月30日	本部コミュニケーション戦略課	ホームカミングデイ特別企画 子ども・あそび・東大の未来 in 安田講堂
10月31日	本部コミュニケーション戦略課	NHK『美の壺 知と美の殿堂 大学』放送のお知らせ
11月4日	本部コミュニケーション戦略課	令和7年秋の紫綬褒章受章、令和7年度文化勲章受章・文化功労者顕彰
11月4日	生産技術研究所	藤田隆史 名誉教授が令和7年秋叙勲 瑞宝中綬章を受章
11月7日	新領域創成科学研究科	新領域創成科学研究科の公式略称マーク「GSFSマーク」が誕生しました！



CLOSE UP 小学生がマイクラフトで東大史を学ぶイベントを開催 （本部コミュニケーション戦略課）



上／壇上で記念撮影に応じる参加者たち。
中／作業に熱中する子どもたち。
下／講師を務めたマイクラフト教育家のタツナミシュウイチさん。

10月18日、ホームカミングデイ特別企画「子ども・あそび・東大の未来 in 安田講堂」が開催されました。150周年記念事業・第6回カウントダウンイベントとして、子どもたちに大学の歴史や可能性に触れてもらおうと企画されたものです。開催に際して日本マイクロソフト株式会社の協力を受け、50名以上の社員がボランティアとして参加しました。

メインのワークショップ「教育版マイクラフトで東大150年の歴史を学ぶ」は、安田講堂4階の特設会場で実施され、約400組の応募者から抽選で選ばれた小学生と保護者が参加しました。参加者は、配布された歴史資料を紐解きながら、渡邊英徳教授（情報学環）によるカラー化写真を用いた講義や、NHK

との包括連携協定の一環として制作された赤門のAR（拡張現実）アプリなどを通じて、東大の歴史や人物について学びました。

その後、教育版マイクラフトのワールドに用意された本郷キャンパスで、チームワークによる建築作業を行いました。本学学生と日本マイクロソフトスタッフらのサポートのもと、東大150年の歴史を表現するマイクラフト作品が次々と生み出されました。

午後には、安田講堂・大講堂の舞台上で成果発表会が行われ、各チームが作品の意図や工夫した点を堂々と発表しました。発表を受け、岩村水樹理事からは「皆さんの想像力に驚きました。これからも遊びながら学んでください」と激励の言葉が送られました。

本年秋の褒章について

辻惟雄名誉教授（人文社会系研究科・文学部）が、令和7年度文化勲章を受章しました。また、渡辺浩名誉教授（法学政治学

研究科・法学部）、山下晋司名誉教授（総合文化研究科・教養学部）が、令和7年度文化功労者として顕彰されました。そして、塩谷光彦名誉教授（理学系研究科・理学部）、日比谷紀之名誉教授（理学系研究科・理

学部）、森山工教授（総合文化研究科・教養学部）が、令和7年秋の紫綬褒章を受章しました。この度は誠にありがとうございます。ゆかりの先生が執筆した紹介記事とお写真はウェブでご確認ください。



UTokyo 香りで満たす、冬のやすらぎ

澄んだ空気に包まれる冬。ふんわりと広がる香りが、心にやさしいぬくもりを届けてくれます。蓮香リードディフューザーの穏やかな香りは、慌ただしい日々の中でほっと息をつく時間にぴったり。シンプルで上品なボトルデザインは、インテリアとしてもお部屋を美しく彩ります。自分へのご褒美にはもちろん、大切な人への贈り物にもおすすめです。香りとともに、やすらぎの冬を過ごしてみませんか。（田）

150ml
5,900円
（税込み）



蓮香
リードディフューザー
（演習林木製
キャップ付き）

UTCCから
のお知らせ



→オンラインストア



CLOSE UP 「はばたく次世代」研究ブースプログラム報告会を実施 (URA推進室)



報告会に参加した若手研究者たち

10月7日、伊藤国際学術研究センター中教室にて、「はばたく次世代」研究ブースプログラム第1期最終報告会・第2期中間報告会を行いました。本プログラムは、2023年度にリサーチ・アドミニストレーター推進室が主体になり応募・採択された第一三共株式会社の応援寄付プログラムにより運営しています。若手研究者が自らの「強み」である基礎研究のテーマを掘り下げるとともに、次のステージへはばたくために、俯瞰的な視野と異分野とつながる柔軟性を養うことを目的と

し、第1期と第2期合わせて100名を超える応募の中から、全17課題を採択しました。

当日は、齊藤延人 理事・副学長のビデオメッセージから始まり、第1期採択者による報告を2部に分け、第2期採択者のポスターセッションをはさんで行いました。プレゼンテーション、ポスターともに活発な質疑応答・意見交換が繰り広げられ、目標とした分野の垣根を越えた交流が図られました。将来、本プログラムの卒業生らによる共同研究が始まることも期待されるような1日でした。



CLOSE UP 研究科の公式英語略称「GSFS」マークが誕生 (新領域創成科学研究科)



10月24日の柏キャンパス一般公開では制定を記念してお披露目会が行われました

新領域創成科学研究科の公式略称マークとなる「GSFSマーク」が誕生しました。研究科の英語表記“Graduate School of Frontier Sciences”から「GSFS」の文字をデザインしたマークです。名称の長さによる表記の負担を軽減し、国際的な認知度を高めることを目的としています。単体での使用に加え、研究科のツリーロゴマークと組み合わせて表現することも可能です。新しい学問領域の創出

を目指し、分野の壁を越えて知の最前線を拓く研究・教育を推進しようとの想いを形にし、研究科の姿勢を象徴するマークです。デザインコンペを実施し、複数のデザイン案に対して研究科内アンケート調査と学内審査を経て採用案を決定、正式に商標登録がなされました(9月26日登録)。GSFSマークを通じて研究科をより親しみやすく身近に感じていただけることを願っています。



CLOSE UP 令和7年度「東京大学稷門賞」の授賞式を挙行 (本部社会連携推進課)



令和7年度「東京大学稷門賞」の受賞者が決定し、10月14日に伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールで授賞式を挙行了しました。本表彰は、私財の寄附、ボランティア活動及び援助等により、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体に授与するもので、平成14年度より毎年度行っています。授賞式では、選考経過の報告、各受賞代表者への表彰状の贈呈があり、その後、総長の挨拶、受賞者からの挨拶がありました。また、授賞式に引き続き、レセプションが行われ、和やかな雰囲気の中、受賞者及び受賞関係者と本学関係者とが懇談しました。

今回の受賞者は以下の皆様です。

- ① 末永直行様・末永博子様
- ② 東京大学法科大学院同窓会様
- ③ オマーン・スルタン国政府様
- ④ みずほ証券株式会社様

『学内広報』が通巻1600号に到達!

1969年に「資料」として生まれ、38号から「学内広報」の名になった本誌は、今号で1600号を迎えました。現在は月刊ですが、昔は週刊でした。当初は「東京大学」、6号から「東京大学弘報委員会」、25号から「東京大学広報

委員会」、1398号からは「東京大学広報室」が発行元となっています。コラム「淡青評論」は301号から開始。現在の判型(A4)になったのは1994年度の983号から、表紙がカラーになったのは2004年度の1286号から、オールカラー化は2009年度の1389号からでした。記念に200号ごとの表紙を以下に並べます。1800号は果たして…!?



1973.6.1/林健太郎総長が特別記事を寄稿。4人の元広報委員長が記念原稿を執筆。東大教員の属性調査企画も。



1978.3.31/向坊隆総長が巻頭挨拶。卒論テーマ変遷、部活動、駒場祭など、学生生活に焦点を絞った特集号。



1983.5.10/平野龍一総長が巻頭挨拶。特集は「東京大学の国際化」。表紙は新インターナショナル・ロッジ。



1988.10.6/森総長が巻頭挨拶。全56頁の特集は「開かれた大学」。表紙は東大牧場と検見川運動場。



1994.10.24/吉川弘之総長が巻頭挨拶。特集は「開かれた大学」。特殊技能を持つ技術系職員にも注目している。



2000.11.13/1200号記念企画はなし。総長挨拶もなし(編集後記があるが宇線研究所の柏移転記念シンポジウム。



2010.6.22/1400号記念企画も総長挨拶もなし(編集後記があるが言及なし)。表紙と特集はPCのリユース。



東京大学と教育の国際化 ― 二つの見方

東京大学における教育の国際化が大学全体の課題として認識され、英語により教育を行う新たな組織の設置についても現在準備が進んでいます。そうした中において、2012年に開始し現在まで継続している、本学の英語による四年制の学部プログラムであるPEAK (Programs in English at Komaba)の経験は有用な知見を提供するものであるかと思います。

私はPEAKが始まってからしばらくした2017年に本学に着任しました。着任後は一貫してPEAKの教育に携わってきましたが、その間英語プログラムのあり方に関して大きく分けて二つの相反する意見を常に聞いていたように思います。それは一つには、教育において英語を使用しても東大の既存の教育内容自体は大きく改変しない形で(「質を下げない」形で)提供すべきという意見であり、もう一つは、英語化を契機として、東京大学における教育自体を「グローバルな」大学教育のモデルに適合させていく必要があるという意見です。対極にあるともいえる二つの立場ですが、私自身が学生あるいは研究者として米国とドイツに合わせて約10年間いた経験とも照らし合わせてみて、どちらの意見についても、大学というものがそれぞれの国の社会の特徴やニーズを体現したものであり、そのありようも国ごとにかなり異なるという事実についての過小評価がいささかあるようにも感じていました。

一方では、外国から多数の学生や教員を東大に受け入れるにあたっては、言語に限らず、大学のカリキュラムやその他のシステム自体の変革が必要となることは実感します。東大の現在のシステムが、それらの人たちのポテンシャルを十分に発揮できるものにはなっていないからです。他方で、大学がそれぞれの国特有の文化や社会のありように依存しないという意味での「グローバル」な大学というのはそもそも世界のどこにも存在しないというのも事実です。その意味では、東大における教育が例えば英語圏のトップ大学のものと何らかの面で異なっていたとしても、「異なる」ということをもって「変えるべき」とは必ずしもならないようにも思います。実際、PEAKの学生についても、自分が育った文化とは大きく異なる文化の中に身を置きたいという期待のもとに、日本的な教育環境を求めて東大を選んでいるという学生も多いような印象を持っています。

PEAKは2026年度の学生募集を最後とすることが決まりましたが、教育の国際化をめぐるこのような議論は今後も東大において継続していくものと思います。

成田大樹
(総合文化研究科)